

松 山 大 学 論 集
第 23 卷 第 5 号 抜 刷
2 0 1 1 年 12 月 発 行

『金瓶梅詞話』における「被動文」についての考察

孟 子 敏

『金瓶梅詞話』における「被動文」についての考察

孟 子 敏

1 はじめに

1.1 『金瓶梅詞話』について

『金瓶梅詞話』は、蘭陵笑笑生の著であり、全10巻で、全100回から構成されており、全字数は80万余である。『金瓶梅詞話』は16世紀末に成立し、中国文学史上、重要な転換点をなす写実小説として非常に有名である。また、写実主義の小説として非常に優れているばかりでなく、当時の口語形式の口頭語の実態にきわめて近いものを伝える「方言調査報告書」とも言えるものである。

『金瓶梅詞話』は、白話小説の伝統的言語形式を打ち破り、一般庶民の日常における言語生活の実態に徹底的に則して書かれている。したがって、言語描写の面から言うならば、『金瓶梅詞話』は、中国小説史上、革命的であると言って全く差し支えないと思う。

この小説は山東方言を基礎として書かれており、16世紀末から17世紀初期にかけての山東南部方言を記録している。その記録によって我々に向かって発信されるものは音声、語彙、文法の各情報に亘っている。1つの例を見てみよう。

(惠蓮) 哭了一回, 取一條長手巾, 拴在臥房裡搭上, 懸梁自縊。不想來昭妻一丈青住房正與他相連, 說後來聽見他屋里哭了一回, 不見動靜, 半日只聽喘息之聲, 扣房門叫他不應, 慌了手腳。教小廝平安兒撬開窗戶, 拴進去, 見婦人穿着隨身衣服, 在門樞上正吊得好。(026/11a/06~10*)

この例に見られる「拴進去」の意味は何であろうか。「拴」の意味は「つなぐ, 縛り付ける」である。「拴進去」はかなり難解であるため, 現代の研究者は安易にその「拴」を改めてしまうのである。たとえば, 台湾中央研究院近代漢語標記語料庫(2008)では, 「拴」は「竄」に直されている。梅節・陳昭・黃霖(1993)は「拴」を「鑽」に直している。例を見てみよう。

慌了手腳, 教小廝平安兒, 撬開窗戶, 竄進去。見婦人穿著隨身衣服, 在門檻下正吊得好。

慌了手腳, 教小廝平安兒撬開窗戶鑽進去。見婦人穿着隨身衣服, 在門檻下正吊得好。

このような直し方は相当不謹慎である。「拴進去」は, 山東蘭陵方言(付録を参照)によれば, 容易に氷解する。実際は, 「拴進去」は「翻進去」(「登って入っていく」というフレーズを表現していて, 「拴」は「翻」の当て字である。「拴」は通常 *shuān* という発音で読み, 「翻」は大体 *fān* という発音で読む。なぜ「拴」が用いられ, 「翻」を表記するのであろうか。以下にその点を述べてみよう。

中古の「知, 庄, 章」という三組の声母は, 韻母が合口の場合, 現代の北京方言では *zh, ch, sh* という発音に変わったが, 蘭陵方言では, *pf, pf', f* というような発音に変わったのである。1つの例を見てみよう。

* 026/11a/06 は, 『金瓶梅詞話』第26回目, 第11ページ目の前半, 第6行目という意味を表す。前半は a で表示, 後半は b で表示する。

	北京方言	蘭陵方言
磚	zhuān	pfān
穿	chuān	pf'ān
拴	shuān	fān

これによって、「拴」と「翻」は同じ発音になってしまう。そのため、著録者は聞きながら、「拴」を用いることによって「翻」を記録したのである。

本論文では、大安影印本『金瓶梅詞話』を底本として利用する。この影印本は日光山輪王寺慈眼堂蔵本と徳山毛利家棲息堂に基づいており、ごく一部分は北京図書館蔵本に拠っている。日光山輪王寺慈眼堂蔵本・徳山毛利家棲息堂と北京図書館蔵本という三種は現存する『金瓶梅詞話』系統の版本で完全に揃っているものである。中国の北京図書館本（現在台湾故宮博物院に収蔵されている）は1932年に中国山西省介休県で発見されたもので、現在にいたるまで最も早く発見された『金瓶梅詞話』系統の版本である。

日本の日光山輪王寺慈眼堂本は、1941年に栃木県日光山輪王寺慈眼堂で発見された。

徳山毛利家棲息堂本は、1962年に山口県徳山毛利家棲息堂で発見された。

日光山輪王寺慈眼堂本と北京図書館本は同版である。だが、北京図書館本は人為的書き換えの箇所がある。徳山毛利家棲息堂本はこの2つと異なる箇所があり、それは、第五回における第九頁(末頁)のところである。長澤規矩也は、慈眼堂本は棲息堂本より早いテキストである可能性が高いと指摘した（長澤規矩也1963）。

1.2 句式について

句式とはセンテンスの構文の型である。本稿では、主語と動作を表す動詞との関係によって、センテンスを主動文・施動文・被動文・使動文という4種類に分ける。

主動文とは、主語が主動的動作を行うというものである。たとえば、例(1), (2)である。施動文とは、主語が対象に対して動作を施すというものである。たとえば、例(3), (4)である。施動文のマークは主に「把」, 「将」(『金瓶梅詞話』では、ほかの言い方もある)である。被動文とは、主語が動作を受けるというものである。たとえば、例(5), (6)である。被動文のマークは主に「被」と「吃」(「乞」のような書き方もある)である。使動文とは主語が対象に動作をさせるというものである。使動文のマークは主に「教」(「交」と「叫」という書き方もある)である。この4種の句式で漢語におけるすべてのセンテンスパターンを包含できる。例を見てみよう。

主動文：

- (1) 我吃。
- (2) 我吃香蕉。

施動文：

- (3) 我把吃了。(北京口語)
- (4) 我把香蕉吃了。

被動文：

- (5) 香蕉被吃了。
- (6) 香蕉被我吃了。

使動文：

- (7) 我叫他吃了。
- (8) 香蕉叫我吃了。
- (9) 香蕉叫豬吃了。

特に注意すべきは、例(8), 例(9)は一般的に被動文であると見られるが、本研究はそのように考えておらず、使動文と見ることである。例(8)は、私にバナナを食べさせたというニュアンスを表している場合が普通である。さらに、例(9)

を見れば、このニュアンスがより明らかとなる。これについて、本稿では馮春田（2000）の観点を支持する。馮春田は「使役」（本論文の「使動」に相当する）を「具体使役」・「抽象使役」という2種に分け、抽象使役はある状況（条件）もしくは原因がNにある動作や行為を施したりあるいはある状態を呈したりさせるが、ときには使役する主語が出現しなく、VP（AP）がNの自主的動作や行為、状態であるという場合もあることを指摘した。筆者は「具体使役」・「抽象使役」という表現を「具体使動」・「抽象使動」に変えることとした（孟子敏 2008）。

1.3 被動文について

被動文は相当に長い歴史を持つ。古代漢語では、「於」,「見」,「為」で被動文が構成される。近代漢語では、主に「被」を使って、被動文を構成する。ある作品では、「吃」を使って、被動文を構成する。

被動文とは、主語が動作を受けるというものである。そのマークは主に「被」と「吃」（「乞」のような書き方もある）である。『金瓶梅詞話』では、「被」と「吃」・「乞」という3つの形態素を使って被動文を構成する。例を見てみよう。

被：

- (1) 正看着, 忽然被一陣風來, 把個婆子兒燈下半截割了一個大窟窿。
(015/03b/10~11)
- (2) 大郎因爲在王婆茶房內捉姦, 被大官踢中了, 死了。(015/04b/01)
- (3) (惠蓮)又道:“你這六娘骰子是個錦屏風對兒, 我看三娘這么三配純五, 只是十四點兒, 輸了!” 被玉樓惱了, 說道:“你這媳婦子, 俺每在這裡擲骰兒, 插嘴插舌, 有你甚麼說處!” (023/05b/09~11)

吃：

- (4) 西門慶道:“你看了還與我。他昨日為剪這頭髮好不費難, 吃我變了臉, 惱了, 他纔容我剪下這一柳子來。” (012/15b/07~09)

- (5) 金蓮吃月娘數説，羞的臉上紅一塊，白一塊，口裡説一千個沒有，只説：“我在樓上燒香，陳姐夫自去那邊尋衣裳，誰和他説甚話來？”(085/04b/08~10)
- (6) 倒吃他千奴才，萬老狗罵將出來，諛的往家中走不迭。(095/05a/05~06)

乞：

- (7) 王婆道：“老九有樁事央及老身來對老爹説。他兄弟何九，乞賊攀着，見拿在提刑院老爹手裡問。攀他是窩主，本等與他無干，望乞老爹案下與他分豁分豁。”(076/16a/01~03)
- (8) 婆子走到跟前，拜了兩拜，說道：“我纔到他前頭來，乞他聒聒了這一回來了。”(037/12a/07~08)
- (9) 月娘道：“恁不合理的行貨子！生生把個丫頭慣的恁沒大沒小，上頭上臉的，還嗔人説哩！到明日不管好歹，人都乞他罵了去罷。要俺每在屋裡做甚麼？”(075/21a/01~03)

本論文では「被」，「吃」・「乞」を中心として、『金瓶梅詞話』における「被動文」を考察してみる。

2 「吃」・「乞」を使う被動文

2.1 「吃」・「乞」の歴史

「吃」は「喫」という書き方もある。もともとの意味は「食べる」である。唐代から、「吃」は動詞の前に置かれて、「受ける」という意味を表すようになった(江藍生1989)。例を見てみよう。

- (1) 火急離我門前，少時終須喫擱。(『敦煌變文集』)

「受ける」という意味を表す「吃」のあとに「N」を置くことによって，被動文のマークとなった(江藍生1989)。例を見てみよう。

- (2) 黃羊野馬搶槍撥，虎鹿從頭喫箭川（穿）。(『敦煌變文集』)
- (3) 花兒偏向蜂兒有。鶯共燕，喫他拖逗。(柳永『紅窗回』・『全宋詞』)

『金瓶梅詞話』では、「吃」と「乞」を使って、被動文を構成する。「吃」と「乞」で構成される被動文は区別がない。例を見てみよう。

- (4) 月娘道：“熱突突死了，怎麼不疼。你就疼也還放心裡，那裡就這般顯出來？……，吃我說了兩句，他可可兒來三年沒過一日好日子，鎮日教他挑水挨磨來。”(062/24a/02～05)
- (5) 婦人道：“……，昨日可是你爹對你大娘說：去年有賁四在家還扎了幾架烟火放，今年他不在家，就没人會扎。乞我說了兩句，他不在家左右有他老婆會扎，教他扎不是。”(078/17a/10～17b/02)

「乞」という書き方は「吃」の省略形と見られる。両者は自由に交替しうる。たとえば、上述の例(4)，(5)である。さらに次のようなケースも「乞」が「吃」の省略形であることを証拠だてるものである。それは、動詞としての「吃」も「乞」で表記される用例があることである。例を見てみよう。

- (6) 老婆笑道：“賊強人！ 倒路死的。你倒會吃自在飯兒，你還不知老娘怎樣受苦哩。”(038/07a/05～06)
- (7) 一客不煩二主，還起動你領他出去，或聘嫁或打發叫他乞自在飯去罷！(086/10a/03～04)
- (8) 金蓮與經濟兩個還在被窩內未起，聽見月娘到，兩個都吃了一驚，慌做手脚不迭。(083/04a/05～06)
- (9) 月娘乞了一驚，就不上去。衆人扶了下來，諛的臉蠟查兒黃了。(033/09a/04)

2.2 「吃」・「乞」の構文形

「吃」・「乞」の基本的構文は「N+吃(乞) NP+VP」である。「吃(乞) NP」の中の「NP」は不可欠である。「VP」は複雑な形でも可であるが、初期には、そのような形が見られない。たとえば、例(16), (17), (18)では、「吃」・「乞」の後に相当長いVPをつけている。例を見てみよう。

- (10) 武松吃他看不過，只低了頭不理他。(001/15a/08)
- (11) 那婆子吃他這兩句道着他真病，心中大怒，喝道：“含鳥小猢猻，也來老娘屋裡放屁！”(004/07a/10~11)
- (12) 常時節吃衆人攛掇不過，只得送與他了。(054/09a/08)
- (13) 惠祥聽見此言，在廚房中罵大罵小，他便裝胖學蠢，自己誇獎說：“……，若不是我，都乞韓夥計老牛箝嘴，拐了往東京去。‘只呀’的一聲，乾丟在水里也不响。如今還不得俺每一個是。”(081/09b/02~06)
- (14) 吳月娘乞他這兩句觸在心上，便紫漲了雙腮，說道：“這個是我浪了，隨你怎的說，我當初是女兒填房嫁他，不是趁來的老婆。”(075/23a/10~01)
- (15) 經濟道：“乞你麻犯了，人一夜誰合眼兒來？”(083/01b/11)
- (16) 我好意往你家問，反吃你兄弟楊二郎拏瓦楔礮破頭，趕着打上我家門來。今日弄的我一貧如洗。(096/08a/10~08b/01)
- (17) 經濟道：“不瞞你老人家說，我與六姐相交，誰人不知？生生吃他信奴才言語，把他打發出去，纔乞武松殺了他。”(092/05b/04~05)
- (18) 鄆哥道：“你嫂子乞西門慶擡到家，待搗吊底子兒。自還問他實也是虛。”(009/07a/07~08)

一般的に「VP」は他動詞であるのが普通ではあるが、『金瓶梅詞話』では、自動詞としての「VP」が被動文を構成する例が見られる。例を見てみよう。

- (19) 一丈青接過來道：“早是我打後邊來，聽見他在屋里哭着，就不聽的動靜兒。乞我慌了，推門推不開。旋叫了平安兒來，打窗子裡跳進去，纔救下來了。”(026/13a/01～04)
- (20) 婦人道：“一言難盡。自從嫁得你哥哥，吃他忒善了，被人欺負，纔得到這裡。”(001/14a/07～08)

また、「N+吃(乞) NP+把 NP+VP」という被動文も見られるが、かなり少数である。例を見てみよう。

- (21) 金蓮不理他。被西門慶遶屋走了一遍，從門背後採出鉞安來要打。乞金蓮向前把馬鞭子奪了，掠在牀頂上。(026/14b/04～06)
- (22) 祝日念于是如此這般告說：“我因尋了你一回尋不着，就同王三官到老孫會了，往許不與先生那裡借三百兩子去。乞孫寡嘴老油嘴把借契寫了。”(042/08a/06～08)
- (23) 春梅走到前邊，還氣狠狠的，向眾人說道：“乞我把賊瞎淫婦一頓罵，立攆了去了。”(075/12a/03～04)

文脈によって、Nはより前方に置くことができる。すなわち、「N」の後にはVPを挿入してもよい。たとえば、例(24)、(25)、(26)である。

- (24) 他爹見了我，訕訕的，乞我罵了兩句“沒廉耻”，落後媳婦子走到屋裡打旋麼，跪着我，教我休對他娘說。(025/09a/03～05)
- (25) 婦人道“……，你生日時，賊淫婦他沒在這里？你悄悄把李瓶兒壽字簪子，黃貓黑尾偷與他，却教他戴了來這里施展。大娘，孟三兒，這一家人那個沒看見？乞我相問着，他那臉兒上紅了。他沒告訴你，今日又摸到那里去了。”(061/08b/05～10)
- (26) 那經濟光赤條身子，沒處躲，揞着被，乞他拉被過一邊，向他身就扎

了一刀子來。(099/08b/01~02)

主語がはっきり分かる場合もしくは主語を明言する必要がない場合には、Nを省略することができる。このような用例はかなり多く見られる。例を見てみよう。

- (27) 武大道：“他搬了去，須乞別人笑話！” 婦人罵道：“混沌魍魎，他來調戲我，到不乞別人笑話。你要便自和他過去！” (001/19b/10~11)
- (28) 小的穿青衣抱黑柱，不先來告五娘說聲，早晚休乞那廝暗算。(025/08a/03~04)
- (29) 桂姐道：“娘且是說的好，乞他奈何的人慌。” (032/04a/11~01)
- (30) 月娘問：“他金子怎的不見了？ 剛纔惹得他爹和六姐兩個在這裡好不辨了這回嘴，差些兒沒曾辨惱了打起來。乞我勸開了。” (043/07a/08~10)
- (31) 西門慶道：“他（也）吃我把奴才撈了幾撈子好的。為你這奴才一時小節不完，喪了兩個人性命。” (076/19a/06~07)
- (32) 你女婦人家，曉的甚麼？ 養的好不肖子！ 今日吃徐知府當堂對眾同僚官吏儘力上數落了我一頓，可不氣殺我也！ (092/10a/01~02)

2.3 「吃」・「乞」の言語環境

『金瓶梅詞話』では、「吃」は66箇所、「乞」は55箇所を用いられ、合わせて121箇所である。「吃」・「乞」の言語環境については、以下のように考察する。

2.3.1 地の文における「吃」・「乞」

「吃」の66回のうち、13箇所は地の文で使われ、総数の約20%を占める。「乞」の55回のうち、13箇所は地の文で使われ、総数の約23%を占める。「吃」と「乞」を合わせた121箇所のうち、26箇所は地の文で使われ、総数の21%

を占めるということとなる。地の文における「吃」・「乞」の比率はかなり少数であるという状況を示す。例を見てみよう。

- (33) 婦人吃他幾句，搶的通紅了面皮，便叫迎兒收拾了碟盞家火。(001/19a/01~02)
- (34) 這西門慶吃他激怒了幾句話，歸家已是酒酣，不往別房裡去，逕到前邊潘金蓮房來。(012/14a/04~06)
- (35) 一面把玳安叫到根前，吃月娘儘力罵了幾句好的。(046/08b/09)
- (36) (金蓮) 看着武松道：“你若有心，吃我這半盃兒殘酒。”乞武松匹手奪過來，潑在地下。(001/18b/06~07)
- (37) 西門慶乞他逼迫不過，一面使王經領申二姐出來，唱與大舅聽。(061/16b/09~10)
- (38) 那秋菊在家把金蓮經濟兩人幹的勾當聽的滿耳滿心，要走上房告月娘說：二人怎生偷出私肚子來，傾在毛司裡，乞掏坑的掏出去。(085/03b/03~06)

特に注意すべきは、ある地の文は、語り手の発話者として聴衆に対する会話と見ることができることである。このような地の文は会話文に属すものと認める。たとえば、以下の例(39)、(40)である。

- (39) 端的不知誰家婦女，誰的妻小，後日乞何人占用，死于何人之手？(001/03b/01~02)
- (40) 只說武大自從兄弟武松說了去，整日乞那婆娘罵了三四日。武大忍氣吞聲，由他自罵。(002/03b/07~08)

2.3.2 会話文における「吃」・「乞」

「吃」の66回のうち、53箇所は会話文で使われ、総数の80%を占める。「乞」

の55回のうち、42箇所は会話文で使われ、総数の約77%を占める。「吃」・「乞」を合わせると、95箇所は会話文で使われ、総数の約79%を占める。会話文における「吃」・「乞」の比率はかなり高い状況を示す。例を見てみよう。

- (41) 那婦人放聲號哭起來，問西門慶要休書。如此這般告訴一遍：“……千也說我擺殺漢子，萬也說我擺殺漢子。拾了本有，吊了本無，沒丫頭便罷了。如何要人房裡丫頭伏侍？ 吃人指罵，我一個還多着影兒哩！”(011/06b/06~11)
- (42) 玉樓道：“你惱的是，他也吃人念了。”(019/13b/01)
- (43) 又被小玉罵道：“淫婦！吃那野漢子搗昏了。皮袄在這裡，却到處尋。”(046/12a/11~12b/01)
- (44) 賁四嫂道：“他爹門外頭來了要飯吃，我到家瞧瞧就來。我來看看，乞他大爹再三央陪伴他坐坐兒，誰知倒把我來掛住了，不得脫身。”(026/12b/10~13a/01)
- (45) 月娘道：“你倒且是會說話兒的，合理都像這等，好人歹人都乞他罵了去，也休要管他一管兒了。”(075/16a/07~09)

特に注意すべきは、ある用例は、地の文であるように見られるが、実際には、語り手の発話者として聴衆に対する会話と見ることができることである(2.3.1を参照)。

このことから見れば、「吃」・「乞」は、主に会話文で使われることが明らかであろう。『金瓶梅詞話』の各回における「吃」・「乞」の具体的な分布状況は4.1を参照。

3 「被」を使う被動文

3.1 「被」の歴史

被動文の「被」は、「被」のもともとの「被る」という意味から派生したも

のである。戦国末に、被動文の「被」が使い始められたのであるが、当初の「被」で構成された被動文は「被 V」という形で、「被」の後には「N」は来ない。たとえば、例(1), (2)である。漢末に「被 N+V」という形が出現したが、たとえば例(3), (4)である。

- (1) 錯卒以被戮。(『史記・酷吏列傳』)
- (2) 信而見疑，忠而被謗，能無怨乎？(『史記・屈原賈生列傳』)
- (3) 亮子被蘇峻害。(『世説新語・方正』)
- (4) 拳體如被刀刺。(『顏氏家訓・歸心』)

3.2 「被」の構文形

「被」で構成される被動文の構文は「N+被 NP+VP」である。この形は被動文の主流として用いられる。「VP」は複雑な形でも可であるが、初期の例ではそのような形が見られない。たとえば、例(5), (6), (7)では、「被」の後には相当長い VP が置かれている。例を見てみよう。

- (5) 武二告道：“小人哥哥武大，被豪惡西門慶與嫂潘氏通奸，踢中心窩，王婆主謀，陷害性命。(009/07b/05~07)
- (6) 雪娥道：“你爹今日被應二衆人邀去門外耍子去了。你大娘和大姐都在花園中打鞦韆哩。”(025/03a/09~10)
- (7) 原來伯爵被湖州何蠻子的兄弟一何二蠻子，號叫何兩峯，請在四條巷內何金蟾兒家吃酒。被韓道國抓着了，請出來。(034/01b/02~04)
- (8) 桂姐被他說急了，便道：“爹你看應花子來，不知怎的，只發訕纏我。”(052/10a/07)
- (9) 西門慶被伯爵說了他恁地好處，到沒的說了。(056/09b/11~10a/01)

文脈によって、N はより前方に置くことができる。すなわち、N の後には VP

を挿入してもよい。たとえば、例(10), (11), (12)である。

- (10) 武大自依前上街賣炊餅，本待要去縣前尋兄弟說話，卻被這婦人千叮萬囑，分付交不要去兜攬他。因此武大不敢去尋武松。(001/20a/1～20b/01)
- (11) 先是經濟拿衣服下樓，往外走，被月娘喝罵了幾句。說：“小孩兒沒記性，有要沒緊進來撞甚麼？”(085/04a/06～07)
- (12) 那婦人見勢頭不好，纔待大叫，被武松向爐內過了一把香灰塞在他口，就叫不出來了。(087/09b/04～05)

一般的に「VP」は他動詞であるのが普通であるが、『金瓶梅詞話』では、自動詞としての「VP」が被動文を構成できる。例を見てみよう。

- (13) 正說着，被西門慶房中咳嗽了一聲，雪蛾就徃廚房裡去了。(023/05a/11～01)
- (14) 經濟進來尋衣裳，婦人和他又在翫花樓上，兩個做得好，被秋菊走到後邊叫了月娘來看。(085/03b/10～11)
- (15) 他母舅張團練來問他母親借了五十兩銀子，復謀管事，被他吃醉了，徃在張舅門上罵攘。(092/01a/11～01)

また、「N+被 NP+把 NP+VP」という被動文もみられるが、かなり少数である。例を見てみよう。

- (16) 想起白日裡聽見那些勾當，只個亂打鼓排鉞不住。被風把長老の僧伽帽刮在地下，露見青旋旋光頭，不去拾，只顧排鉞打鼓，笑成一塊。(008/12b/04～06)
- (17) 西門慶纔數子兒，被婦人把棋子撲撒亂了。(011/02b/08)

- (18) 經濟氣得半日不言，把嚴州府遭官司一節說了：“多虧正宅徐知府放了我，不然性命難保。今被楊大郎這天殺的把我貨物不知拐的往那里去了。”
(092/11b/01~04)

文脈によっては、主語がはっきり分かる場合もしくは主語を明言する必要がない場合には、Nを省略することができる。たとえば、例(20)では、主語は蔣竹山であり、例(22)では、主語はすで触れた「韓嫂」を指す。ただ、例(22)の原文にある文字を抜かしたと思う。例(19)、(21)、(23)では、主語を明言する必要はない。例を見てみよう。

- (19) 那李外傳見是武二，誠得謊了，半日說不出來。被武二一腳把桌子踢倒了，碟兒盞兒都打得粉碎。(009/09b/11~10a/02)
- (20) 罵的竹山狗血噴了臉，被婦人半夜三更，赶到前邊舖子裡睡。(019/06b/05~06)
- (21) 被玉樓惱了，說道：“你這媳婦子，俺每在這裡擲骰兒，插嘴插舌，有你甚麼說處。”(023/05b/10~11)
- (22) 經濟把因走百病被人剜開門，不見了狗，坐在當街，哭喊罵人……，今早他漢子來家一頓好打的……(024/08a/05~07)
- (23) 金蓮道：“不是這等說，惱人子腸了，单管黃猫黑尾，外合裡差，只替人說話。吃人家碗半，被人家使喚。得不的人家一個甜來兒，千也說好，萬也說好。(058/17b/04~07)

「被」と「吃」・「乞」の構文形を比べてみれば、「N+吃(乞) NP+VP」という形では、「吃」・「乞」の後では「NP」は不可欠で、「N+被 NP+VP」という形では、「被」の後の「NP」は無くてもよい。例を見てみよう。

- (24) 也是一家子新娶箇媳婦兒，是小人家女兒，有些手腳兒不穩，常偷盜婆

婆家東西往娘家去。丈夫知道，常被責打。(012/16b/04~06)

(25) 那老婆原來妳子出身，與責四私通，被拐出來占爲妻子。(078/04b/01~02)

(26) 那春梅方救得，金哥却甦着，听言大驚失色，走到書院内。經濟已被殺死在房中，一地鮮血橫流，不覺放聲大哭。(099/09a/02~04)

3.3 「被」の言語環境

『金瓶梅詞話』では、519箇所「被」を用いて被動文を構成している。「被」の言語環境については、以下のような考察を加える。

3.3.1 地の文における「被」

すでに触れたように、語り手の叙述言語としての地の文は全篇の約4割のみであり、「被」が用いられる箇所は384回であり、総数の約74%を占め、優勢である。例を見てみよう。

(27) 婦人正手里擎着叉竿放簾子，忽被一陣風將叉竿刮倒。婦人手擎不牢，不端不正，卻打在那人頭巾上。(002/04b/04~05)

(28) 只叫天福兒來幫助，被魯華一脚踢過一邊，那裡再敢上前。(019/07b/10~11)

(29) 伯爵纔待言語，被希大把口按了，說道：“桂姐，你唱，休理他！”(052/11a/01)

(30) 這裡兩個一動一靜，都被這胡秀聽了個不亦樂乎。(061/07a/01)

『金瓶梅詞話』において、ある箇所は会話文であるように見られるが、ニュアンスを検討すると地の文であると認められるものがある。たとえば、すでに触れた「如此這般」という形は、実際には語り手の叙述言語である。このようなケースは地の文に属する。たとえば例(31)である。まだ、ここで、詞曲や酒令

(宴会のゲーム) などは一応地の文と見なす。たとえば、例(32)である。例を見
てみる。

- (31) 來興兒向前附耳低言，如此這般，被宋仁走到化人場上攔着屍首，不容
燒化，聲言甚是無禮，小的不敢說。(027/01b/05~06)
- (32) 天上飛來一仙鶴，落在園中吃鮮桃。却被孤紅拏住了，將去獻與一提學。
天上飛來一鷓鴣，落在園中吃朱櫻。却被二姑拏住了，將去獻與一公卿。
(060/07a/02~05)

3.3.2 会話文における「被」

会話文で使われる「被」は135箇所であり、総数の約26%を占める。例を
見てみよう。

- (33) 幾句語兒，來旺兒不言語了。半日說道：“不是我打你，一時被那廝局
騙了。”(025/05b/03~04)
- (34) 伯爵道：“莫不又是王三官兒家？前日被他連累你那場事，多虧你大
爹這裡人情，替李桂兒說，連你也饒了。這一遭雀兒不在那窩兒罷了！”
(058/11a/01~03)
- (35) 玳安道：“被雲叔留住吃酒哩！”(076/23a/05)
- (36) 經濟便把東京父死往回之事告說一遍：“恰才這殺死婦人，是我丈人的
小潘氏。不知他被人殺了。”(088/03b/08~09)

ある会話文で用いられる「被」はやはり改まったモードに属するものである。
たとえば、以下の例(37)は應伯爵が韓道国に上訴書のようなものの書き方を教え
る内容である。例(38)，(39)は審判所で話した内容で、当然かなり正式な言葉
を使っているわけである。この問題については、方経民(2004)がすでに指摘し
ている。実際には、このような「被」は、地の文における「被」と同じレベル

に属するものと見なすべきである。

- (37) 説着跪在地下，伯爵用手拉起來。說道：“賢契，這些事兒我不替你處？你取張帋兒，寫了個說帖兒，我如今同你到大官府裡對他說。把一切閑話多丟開，你只說：我常不在家，被街坊這夥光棍時常打磚掠瓦，欺負娘子。衆人稱你兄弟韓二氣忿不過，和他嚷亂，反被這夥人羣住，揪採在地，亂行踢打，同拴在舖裏。望大官府討個帖兒，對李老爹說。”(034/01b/09～02a/03)
- (38) 那韓二先告道：“小的哥是買賣人，常不在家去的，小男幼女，被街坊這幾個光棍要便彈打胡博詞叔兒，坐在門首胡歌野調，夜晚打磚，百般欺負。小的在外另住，來哥家看視，含忍不過，罵了幾句，被這夥羣虎棍徒，不由分說，揪倒在地，亂行踢打，獲在老爺案下，望老爺查情。”(034/06b/09～07a/03)
- (39) 那夥人一齊告道：“老爺休信他巧對，他是耍錢的搗鬼。他哥不在家，和他嫂子王氏有姦。王氏平日倚逞刁潑，毀罵街坊。昨日被小的每捉住，見有底衣爲證。”(034/07a/03～06)

総括するならば，地の文と会話文の比較に基づけば，地の文における「被」は優勢を示し，「被」は書き言葉であると言えよう。会話文の場合，「吃」・「乞」が優勢を占める。詳しい情報は2.3を参照。

全篇の各回における「吃」・「乞」と「被」の分布はどのような状況であるか，以下に考察を行っておこう。

4 「吃」・「乞」と「被」の分布と考察

4.1 「吃」・「乞」と「被」の分布

地の文と会話文に分けて，各回における「吃」・「乞」と「被」は統計される。具体的分布は表1の通りである。

表1 「吃」・「乞」・「被」の分布表

項目 回数	「吃」		「乞」		「被」		項目 回数	「吃」		「乞」		「被」	
	地の文	会話文	地の文	会話文	地の文	会話文		地の文	会話文	地の文	会話文	地の文	会話文
001	1	3	2	4	11	1	051		2			7	3
002			1		5	1	052		2			10	
003						3	053		2			3	3
004					3		054	1				3	1
005		3		1	6		055						1
006					1		056					3	8
007	1				1		057					2	
008		1			6	1	058	1				2	5
009				1	5	6	059					6	1
010					3	0	060					7	1
011		3			7	3	061			1	1	2	2
012	1	1			6	4	062		2			2	1
013		3			1	3	063					3	
014	1	4			3	1	064		1				1
015					2	2	065					2	
016		1			3	1	066					2	
017					1	1	067				1	1	3
018		1			5		068					7	
019		3		1	10	1	069					3	2
020	1	1	1	2	2	1	070					1	
021					4	3	071					1	
022					5		072					3	
023		1			3		073			1	1	6	1
024		1			7	1	074					4	
025		1		3	6	3	075			1	7	7	1
026			1	2	8	1	076		1		1	7	2
027				2	5		077					3	
028				1	7	1	078		1	1	2	5	2
029					1	1	079		1			5	
030					2		080					1	1
031					4		081				1	6	
032				1	2	1	082					3	1
033	1	1			7		083				1	6	2
034				1	3	8	084					3	2
035		1			3	1	085	1		1		5	2
036					1		086	1			2	1	2
037				1	0	1	087		1			5	1
038					4	2	088		1			5	7
039					2		089					4	
040					1		090					6	
041					1		091		1			6	
042				2	1	1	092		1		1	7	5
043				1	1		093	1	1			2	
044					1	1	094					5	2
045		1					095	1	1			5	3
046	1	1			3	1	096		2				1
047				1	6	2	097					2	5
048					1	1	098					6	1
049					1	1	099			1		7	1
050				1	5		100				1	16	2
合計	「吃」				「乞」				「被」				
	地の文：13		会話文：53		地の文：13		会話文：42		地の文：384		会話文：135		

4.2 「吃」・「乞」と「被」の考察

表1に基づき、以下のような考察を行う。

①全篇において、「吃」（「乞」を含む）は121箇所、「被」は519箇所用いられており、「被」が優勢を占めている。

②地の文では、「吃」は26箇所、「被」は384箇所用いられている。会話文では、「吃」は95箇所、「被」は135箇所用いられている。このことから見れば、「被」が書き言葉として使われているということは明らかであろう。「吃」は話し言葉としても使われるのである。

③全篇の99回においては、「被」が使われていて、第45回においてのみ「被」が使われていない。「吃」・「乞」は44回においては見られず、全篇の約半分においてのみ見られる。且つ、ある回では、「吃」・「乞」は1回しか使われていない。たとえば、第7、8、9、16、18、58、67、99、100回などである。このことから見れば、当時「吃」・「乞」は普通の言葉として使われなくなっていたのかもしれない。特に、書き言葉として使われる「乞」は極く少数で、正式な場所で使われる「乞」は見られない。

4.3 「被」と「吃」・「乞」の変遷

以上の考察によれば、「被」というマークで構成される被動文は書面語として使われたものであることが明らかである。『金瓶梅詞話』以前の時期における「被」の地の文・会話文における使い分けの状況はどうであったのかは、現状では資料が欠如しているため、十分な考察は行えない。『金瓶梅詞話』以後、「被」はやはり書き言葉として使われていた。たとえば、『紅樓夢』では、地の文で使われる「被」の比率が高い（方経民2004）。

現代の蘭陵方言（中原官話に属する）では、口語では「被」を用いない状態にある。「吃」・「乞」というマークは、現代の蘭陵方言では見られない。当時口語で言われても、やはり被動文のマークとしての生命力は弱かったのであろう。原因としては、「吃」（「食べる」）という常用言葉と競合し、「被動」を表

す「吃」はその地位を確保できなかったのではないかと思われる。もう1つの原因としては、口語において被動文は出現してはいたが、十分には成熟していなかったのではないかということも考えられる（施動文・使動文と比べて、被動文の用例はかなり少ない）。いずれにせよ、結果的には、「吃」は失墜し、口語の被動文は消失してしまったのである。したがって、被動文とは書面語面での句式だと言することができるのである。

付録：蘭陵方言的音韻システム

(1) 声母

計26個（零声母を含む）

p 布步別	p ^h 怕盘	m 门猫		
pf 猪诸住	p ^f 厨初锄		f 飞树水	v 如软瑞
tθ 早造	tθ ^h 草槽		θ 三扫	
t 到道夺	t ^h 太同	n 难奶女	l 路吕莲	
tʃ 招争蒸	tʃ ^h 超昌潮	ʃ 扇烧		ʒ 染让
tc 精景节结	tc ^h 清轻齐旗		c 修休酸	
k 贵跪	k ^h 开葵		x 虎胡	y 艾安
∅ 盐喂远				

(2) 韻母

計40個（[ye], [iei] という変化した韻母を含む）

ɿ 滋四	i 第地力集	u 补木绿	y 女举组足续
ɿ 知直			
u 儿耳二			
e 杯百笔塞吹	ie 鷄米	ue 推贵	ye 醉岁
o 偷周肉	io 牛酒六		
ə 波薄说车哥	iə 爹铁镊姐	uə 多夺落	yə 坐错脚瘸雀
ɛ 拜该拽帅	ie 街解挨	ue 怪外	yɛ 圈院
ɔ 包茂	io 膘挑椒敲		
a 爬割八搭抓	ia 家掐轧	ua 瓜滑	
ɔ̃ 笨枕准恩	iɔ̃ 贫林	uɔ̃ 蹲问	yɔ̃ 军俊村
ã 班站砖	iã 边咸眼	uã 端晚	yã 卷圆钻
əŋ 捧孟楞肺	iəŋ 兵鹰	uŋ 东共	yʊŋ 兄永松
aŋ 帮房庄	iaŋ 凉虹羊	uaŋ 光框忘	

(3) 声調

計4個

阴平 13 高, 猪, 专, 低, 边, 开, 抽, 天, 偏, 伤, 三

竹, 得, 笔, 出, 七, 窄, 百, 切, 月, 木, 麦

阳平 53 穷, 陈, 才, 唐, 平, 寒, 神, 扶, 娘, 龙, 云

局, 宅, 食, 杂, 白, 合, 舌, 俗, 服

上声 44 古, 纸, 走, 短, 口, 丑, 好, 手, 五, 女, 买

去声 31 帐, 醉, 对, 菜, 怕, 汉, 送, 共, 大, 饭, 帽

近, 柱, 是, 坐, 抱, 厚, 社, 父

また、軽声もある。ここでは一応省略する。

参 考 文 献

江藍生 1989 被動関係詞“吃”の来源初探, 《中国語文》第5期。

台湾中央研究院近代漢語標記語料庫 2008 <http://www.sinica.edu.tw/ftms-bin/kiwi1/pkiwi.sh>

馮春田 2000 『近代漢語語法研究』, 山東教育出版社, 濟南。

方經民 2004 『『金瓶梅詞話』和近代漢語被動式的發展』, 『現代中国語研究』, 第6期, 朋友書店, 京都。

孟子敏 2008 『『金瓶梅詞話』における「把」・「将」についての考察』, 『松山大学論集』第20卷第2号, 金村毅教授記念号, 2008年6月, 松山。

長澤規矩也 1963 『『金瓶梅詞話』影印の過程』, 『大安』, 五月号, 大安書店, 東京。

梅節・陳昭・黃霖 1993 『金瓶梅詞話』, 梅節校訂, 陳昭・黃霖注釈, 夢梅館, 香港。